

農林水産大臣賞受賞

区民が主役の伊計自治会
～住民による住民のための自治運営！～

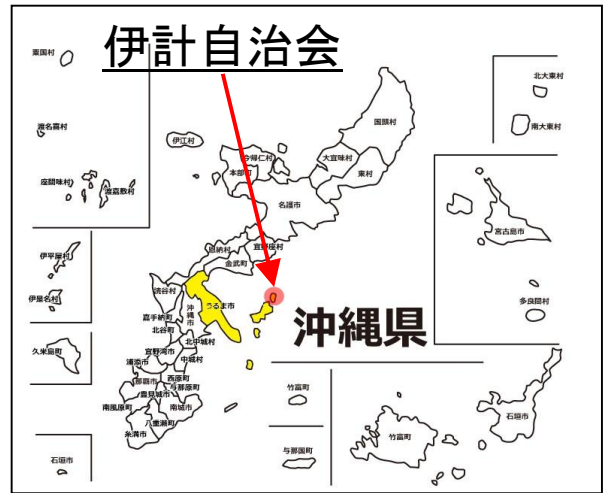
いけいじちかい
受賞者 **伊計自治会**
(沖縄県うるま市)

■ 地域の沿革と概要

伊計島が位置するうるま市は、那覇市より北東へ約 25km、沖縄本島中部の東海岸に接し、東南に伸びる勝連半島から北東に有人・無人を含めて 10 の島々があり、美しい景観と豊かな自然環境に恵まれている。

平成 17 年に旧具志川市、旧石川市、旧勝連町及び旧与那城町の 2 市 2 町の合併により、県内で 3 番目に人口が多い、中部圏域で中核的な役割を担う自治体となっている。

第 1 図 位置図



■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

伊計島の外周は約 7.5km、面積 1.72 km²の小さな島で、標高約 25m の平坦な地形であり、琉球石灰岩を基盤とし透水性が高く耕土の浅い地質である。島の面積の約 8 割が区画整理された農地である。

島の産業は主に農業と漁業で成り立っており、農家の数は 26 戸、漁業経営体数は 11 経営体で、農業での主要作物は、さとうきび、かんしょ、葉たばこであるが、最近では村おこしの契機として麦を栽培している。



写真 1 伊計島



写真 2 海中道路

第 1 表 地区の概要

事項	内容	
地区の規模	集落の集合体	
組織の性格	機能的な集団等	
人口等	総人口	125,338人
	総世帯数	47,959戸
農業経営体数 (内訳)	農業経営体数	359経営体
	個人経営体数	340経営体
	団体経営体数	19経営体
	(内、法人経営体数)	15経営体
農用地の状況 (内訳)	総土地面積	8,702ha
	耕地面積	923ha
	田	11ha
	畑	912ha
	耕地率	10.6%
	一経営体当たり耕地面積	2.6ha

注：国勢調査、農林業センサス、農林水産関係市町村別統計、農業センサスの令和 2 年うるま市のデータ

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

伊計島では、昭和 57 年の伊計大橋が開通するまでは船で人、食料及び生活物資を運んでいた。特に飲料水の確保には苦勞が多く、昭和 11 年に水道が開通するまでは井戸からの水汲み作業を余儀なくされ、貯水タンクまでの水道工事が施された後も、島民全体への安定供給までは至っていなかった。

伊計大橋の開通と同時に水道も整備され、自動車の往来により島の生活水準も格段に向上した一方で、島民の島外流出による人口減少が発生し、小中学校の統廃合に加え、共同売店の赤字経営による存続の危機、ホテル閉鎖により賃借料等の収入減による自治会財政運営の危機に直面していた。

そのような状況の中、平成 25 年に就任した現自治会長を中心に島の再生を賭けた新たな取り組みが行われた。



写真3 伊計大橋

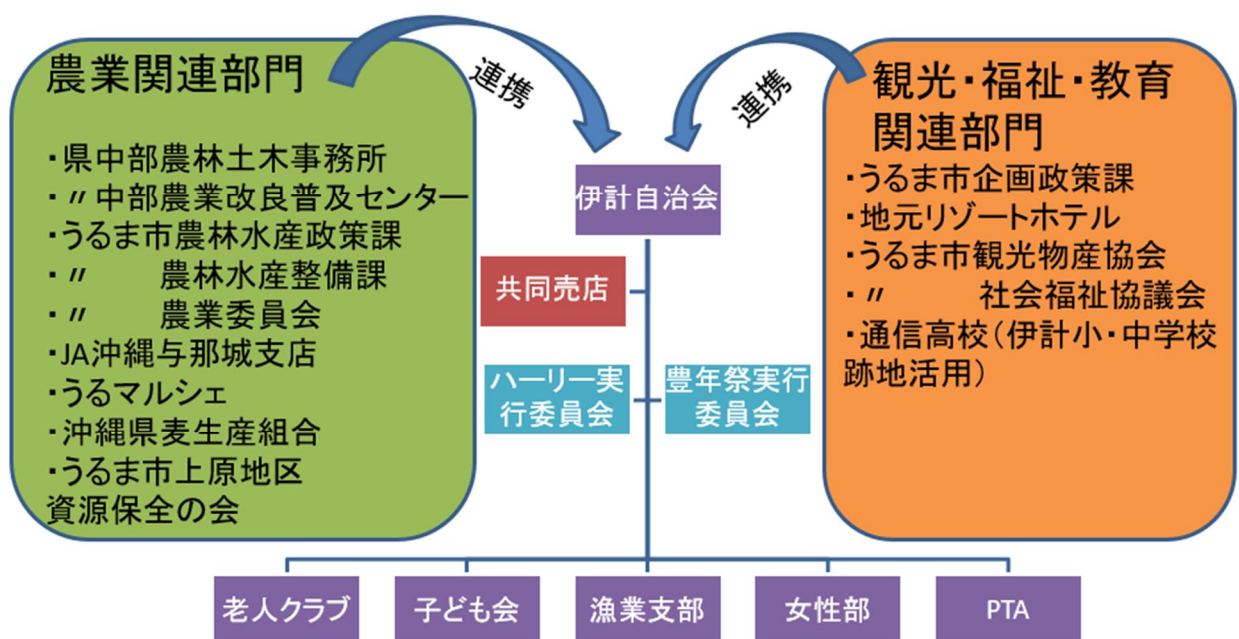
(2) むらづくりの推進体制

集落の運営は、伊計自治会を中心に行われる。自治会は、自治会長、審議委員長、副審議委員長、会計、書記が各 1 名、監事 2 名で構成されており、島の決め事は、自治会役員会で承認後、役員と各団体長による審議委員会を経て、区民総会で決定される。

自治会は、老人クラブ、子ども会、漁業支部、女性部及び PTA の組織を有し、各組織は自治会と連携し活動している。

また、農業関連部門や観光・福祉・教育関連部門と連携を図り、むらづくりを推進している。

第2図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

地域の活気を取り戻すために、島民のコミュニティの場となる共同売店の存続、経営改善が行われた。また、伊計島の特産品を使用した商品開発を行い共同売店で販売、共同売店にコミュニティスペースを設け島民と観光客との交流の場として利用している。

さらに、オーバーツーリズムに対処するため、伊計島憲章を制定し、島民の生活環境の改善を図っている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 生産力向上・経営改善への取組

「伊計島共同売店プロジェクト」として、地域コミュニティの核となる伊計島共同売店の存続可能な運営のため、マーケティング調査や売り場の改革、コミュニティスペースの設置に取り組み、経済的役割だけでなく福祉的役割を担っている。

平成 28 年頃に 6.6a の遊休農地を活用して「小麦」の栽培を開始し、現在では 2.2ha まで規模拡大され伊計島の特産品と位置づけられている。

島内で収穫した麦は沖縄県麦生産組合に委託して製粉し共同売店で販売、さらに「サーターアンダギー」や「小麦珈琲」などの加工品を商品化している。

また、かんしょ（黄金イモ）においては、お菓子「くがに芋」を製造・販売する他、地元農家が営む加工販売店でスイーツとして販売するなど、伊計島の特産品のブランド化を図っている。

(2) 後継者育成への取組

自治会が管理している麦畑では、移住者と地元の交流を目的に麦踏み体験や収穫体験を行っている。体験には子ども会も参加し、伝統文化の継承や後継者の育成に取り組んでいる。これらの取り組みは、近隣の島や他地域にも優良事例として波及している。

第3図 伊計島共同売店 利益の推移



写真4 伊計島共同売店



写真5 小麦の収穫体験

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 生活・環境整備面の取組

ア グリーンベルト

伊計島では、伊計ビーチや大泊ビーチをはじめとした手つかずの白い砂浜に多くの観光客が訪れているが、農地からの赤土流出により、海上汚染や生態系への影響が危惧されている。畑からの赤土流出を防止するため、うるま市上原地区資源保全の会広域協定の活動として、グリーンベルトの植栽を行っている。



写真6 グリーンベルト植付

イ 防風保安林

伊計島ではこれまで延べ5,000本の防風保安林の植樹を行っており、台風等の自然災害から農作物や農地を守っている。

伊計自治会が定期的に巡回活動を行うなど、防風保安林の維持に努めている。

防災農業確立に向け、防風・防潮林等の整備等を積極的に推進し、他の模範となる組織として、令和5年度に県から「防災農業賞」を受賞。

ウ フラワーロード

景観づくりとしての取り組みでは、島を南北に貫く市道沿い約1.5kmのさとうきび収穫後の畑にひまわりを植えて、「フラワーロード」として島を訪れる人を出迎えている。

エ 伊計島憲章

伊計島憲章は、島民による4回のワークショップ（住民アンケート・意見交換）により制定し、区民総会で承認された。

憲章には、住民に対し、「島の環境と景観を保つため、いかなる場所においてもゴミを投棄・放置せず、定期的に清掃しよう。」や「何人も島と島の周囲の自然、環境や景観を大きく損なうような開発行為をしない。」と示されている。

また、来島者に対しては、「海浜や海岸などで釣りをを行う場合は、ゴミを放置せず、片づけを最後まで行うこと。」と示され、景観を維持するため、各個人の協力を呼び掛けている。

(2) 都市住民との交流等の取組

ア 旧伊計島小・中学校跡地に通信制高校を誘致

閉校した小中学校の跡地利用として、通信制高校の誘致を行い、毎年30回程度のスクーリングで約200名の生徒を概ね隔週で受け入れている。自治会や区民協力のもと、ハーリー体験などの文化教育、農業体験による地元との交流に取り組んでいる。



写真7 ハーリー体験

イ アートによる島おこし

自治会長を中心に最初に行った取り組みは「島アートプロジェクト」として、平成24年から廃校を利用し開催され、県内外の若手芸術家、美術家、地元住人と共同で行うアートによる島の地域活性化事業であった。

平成27年からは近隣の宮城島、平安座島、浜比嘉島も加わり「イチハナリアートプロジェクト+3」として開催、令和元年には津堅島を加え「シマダカラ芸術祭」として開催し、文化と経済の両面で地域活性化が図られている。

(3) 定住促進、女性の社会参画促進の取組

伊計自治会では移住者受入れについて、本来であれば自治会が主体的にやらないといけないという考えのもと、関係団体と連携を図り取り組んだ結果、平成24年以降、約20名が移住している。

共同売店では、従業員の4名のうち3名が女性従業員で、そのうち1人は調理担当として弁当や惣菜の販売を行っている。

「サーターアンダギー」や「くがに芋(商品名)」などの加工品を女性従業員で製造を担っており、共同売店を中心に女性の参画社会も進みつつある。



写真8 お菓子
(いけどら、くがに芋)